

群 教 セ	E03-03
	平 18.234 集

自分の力を十分に発揮できる

児童を育てる学級経営の工夫

—友達や家族との心のつながりを生かした「サニーかがやきカード」を活用して—

特別研修員 山口 みゆき (伊勢崎市立境小学校)

《研究の概要》

本研究は、小学3年生を対象に学校行事における自己の振り返りと、友達、担任、家族からの励ましのメッセージを記録した「サニーかがやきカード」の活用を通して、自分の力を十分に発揮できる児童を育てる学級経営を目指したものである。3つの学校行事で、段階的に児童の意識を個人から集団へ向けていった。学級の目標と個人の目標をもち、励まし合い努力を認め合いながら集団として高まると共に、個人の成長も図るようにした。

○ はじめに

本学級(小学3年生 男子19名 女子16名 計35名)の児童は素直で明るい児童が多い。担任として、児童が自ら定めた目標を多少困難に感じても乗り越えようと努力することや、自分の力で乗り越えたときの喜びを感じる事が大切であると考えた。もし結果が出なくても他者から励まされたり、努力が認められたり、友達の姿に喚起したりすることで、自分の力を十分に発揮しようと意欲を高めていくことが大切であると考えた。

本研究には、「サニーかがやきカード」の活用を通して、自分とつながりのある人々から自分は支えられていると感じることで、物事に精一杯取り組む児童が育って欲しいと考えた。

I 研究の概要

1 基本的な考え方

(1) 自分の力を十分に発揮するとは

「自分の力を十分に発揮する」とは、物事に精一杯取り組むということである。「授業に集中する」「体をたくさん動かす」「仕事に責任をもって取り組む」などの日常的な活動において、精一杯取り組もうと意識することで、子どもは成長していく。学校生活では日々、些細なことであっても児童一人一人の成長している様子が見られる。ほんの少しの進歩であっても、数分前の自分より

努力していれば、精一杯取り組めたということに気付かせたい。そのために「ほんの少しでも継続して努力を積み重ねていくことが大切である」「壁に当たって砕けたとしても、その過程に意味がある」ということにも気付かせたい。

2 研究内容及び方法

(1) 研究の内容

「サニーかがやきカード」を活用し、研究主題を実現するため、指導1～3を行うこととした。

○ 指導1

運動会に向けた取組の中で、「自分が一番努力したい種目」を意識した個人目標を設定し、振り返る。友達、担任、家族から自分の活動が認められることで、目標に向かって努力することの大切さに気付けるようにする。

○ 指導2

社会科見学に向けた取組の中で、「グループの活動」を意識した個人目標を設定し振り返ることで、目標に向けて友達と協力し、より一層頑張ろうとする意識を持てるようにする。

○ 指導3

持久走大会に向けた取組の中で、「自分のための努力」と「友達のための努力」の2つの個人目標を設定し、振り返る。練習、大会本番を通して、集団(クラス全員)で励まし合いながら、個人(自分)の目標達成に向けて、自分のもっている力を発揮できるようにする。

(2) 研究の方法

ア 「サニーかがやきカード」の活用について

4月より「太陽のように一人一人が輝いている（前向きに努力する）クラスにしよう」との願いから、「さんねんにくみの仲間たち」を「サニー (SUNNY) の仲間たち」と称し活動してきたことが名前の由来である。児童が物事に挑戦し前向きに取り組むためには、目標の設定と目標に向かって努力し続けることが大切である。そこで運動会、社会科見学、持久走大会の三つの行事において「サニーかがやきカード」を用いた活動を行うこととした。

「サニーかがやきカード」には「学級の目標（表紙）」「個人の目標」「友達からのメッセージ」「自分の活動の振り返り（自己評価及びコメント）」「先生からのメッセージ」「お家の人からのメッセージ」を記録する。

資料1 サニーかがやきカード(内容)基本形

個人目標	自己評価 4段階
友だちからの メッセージ添付	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	自分の振り返り
	先生からのメッセージ
	お家の人からのメッセージ

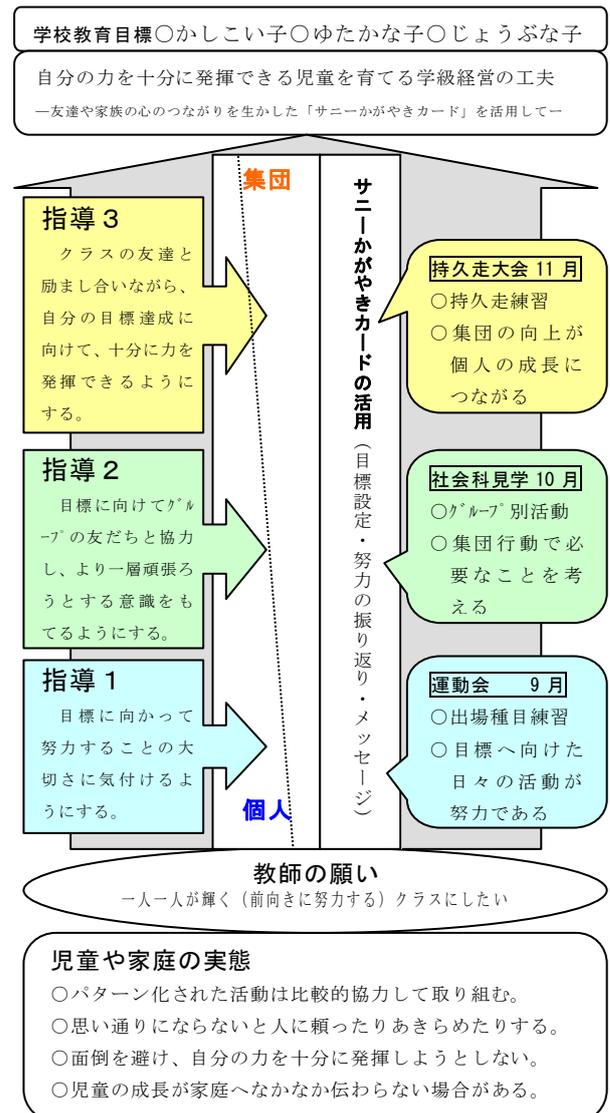
学級活動や朝の会・帰りの会を活用し、各行事における学級の目標の設定、それに沿った個人目標の作成、個人目標を基にしたグループの編成を行う。児童はグループで活動していく中で、友達の頑張っている姿や優しい言葉、協力してくれたことなどを発見する。これらのことを付箋に記入し「友達からのメッセージ」として本人に渡す。自分もグループの友達からのメッセージを受け取り「サニーかがやきカード」に添付する。「友達からのメッセージ」により自分が目標に向かってどれだけ努力してきたか気付き、1週間の活動を振り返り、自己評価を記入する。

児童が前向きに努力するためには保護者の協力も大切だと考える。小学校中学年の児童にとって、家族の励ましの一言は嬉しいものであり、活動の原動力となることも多い。そこで、「先生からのメッセージ」で子どもの努力や成長の様子が児童にも保護者にも伝わるように、担任からの言葉を添え、一人一人の児童を通して保護者に渡す。保護者は「サニーかがやきカード」を見て、学校で

の子どもの成長に気付き、小さな努力も認め、本人への励ましのメッセージを添えて児童に返す。

「サニーかがやきカード」は1週間に1部作成するが、運動会と社会科見学では、行事直前の週と行事を含む週の計2週間、持久走大会については行事前の2週と行事を含む週の計3週間行った。「サニーかがやきカード」を通して、運動会においては自分が目標に向かって努力する意識をもたせたい。社会科見学においては、グループの友達と声を掛け合い協力し合うことで、目標に向かってより一層努力しようとする意識を高めたい。そして、持久走大会においては、クラス全員で励まし合い、自分のもっている力を精一杯発揮させてほしい。将来、児童一人一人が困難にぶつかったとしても、子どもの頃に「目標に向かって努力してきた経験」を励みに、乗り越えてほしいと願っている。

イ 研究の構想図



ウ 抽出児A子について

本研究では、成果や課題を確認するために、学級全体及び抽出児A子の活動の様子を記録した。抽出児A子は、明るく活発である。授業中、課題について考える場面では、時々自分で深く考える前に「分からない。教えて。」と担任や友達に頼る様子が見られた。

II 実践の概要

1 運動会に向けた「サニーかがやきカード」の活用

(1) 活動の概要

学級活動において学級の目標を決め、その後学級の目標に沿った個人目標を決め、グループを編成した。運動会終了後、「サニーかがやきカード」に記録されていることを基に、自分が頑張ったことについてワークシートにまとめた。目標達成のために取り組んできたことは自分の努力であり、目標が達成されてもされなくても、努力する自分の姿や気持ちが大切であることを考えた。

(2) 実践のまとめ

学級活動で「運動会の学級の目標を決めよう」というテーマで話し合いを行った。運動会では、全校が赤・青・黄・緑の4つの団に分かれて、点数を競う。そのうち本学級では黄色団と緑団の2つに分かれた。話し合いの結果、資料2の理由から「あきらめないで 心を一つに とりくもう」に決定した。

資料2 「運動会」学級の目標の理由

「あきらめないで」

- ・3年生になり60m走から100m走になったので最後まで走り抜くため。
- ・自分が目指す目標に向かって達成できるようにがんばるため。

「心を一つに」

- ・ダンスや全員リレーなど一人一人が勝手にがんばるのではなく、みんなの心が一つになればクラスが一つにまとまるから。

話し合いで「リレーや短距離走は団で分かれてしまうけれど、ダンス（西遊記の話を表現）ならクラスで一つになれるよ。」という発言もあり、児童は団の結びつきを意識しているが、学級としての結びつきも意識していることが分かった。

次に個人目標を決めた。「自分の力を発揮するため、より一層目標に向けて集中してほしい。」

という思いから、一番自分が頑張りたい種目を意識して考えさせた。個人目標を設定したら、個人目標と同じ種目を掲げている児童でグループを編成した。これは、グループの仲間同士声を掛け合い、休み時間などを利用して共に自分の目指す種目の練習に取り組みやすくするためである。また、グループとしての集団意識を高めるために、資料3のようなグループ名を考え、付けさせた。

資料3 運動会グループ

種目	黄色団グループ	緑団グループ
100m走	キウダム100m	エラト100m
ダンス	イエローさいゆうぶ	トラベルグリーンダンス
全員リレー	イエローリレーチーム	グリーンラン
団リレー	Yellow チーム	緑ファイターズ
ナルト(遊競技)	スーパーナルト	

ダンスで全体の流れやポジションを練習する段階になると、児童は「○○ちゃん、こっちだよ。」「あの木を目印に並ぼう。」「移動でぶつからないように私は右側を通るから、○○ちゃんは左側を頑張ってね。」などと、互いに声を掛け合いながら練習に参加していた。休み時間の様子を見ると、全員リレーの児童が中心となってバトンパスの練習をしたり、100m走のダッシュの練習をしたりしていた。ナルトチームの児童は人数の調整で2度走る担当に率先してなった。

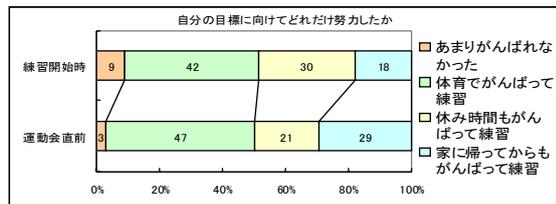
抽出児A子はダンスを目標にした。A子はクラスの中で身長が高く、3年生全体のセンターポジションとなった。A子はダンスの練習に進んで取り組み、休み時間には教室で曲を流し、「じゃあ、本番のつもりで私（センターポジション）がここだからね。」と友達に声を掛けていた。

運動会前の数日間、大雨のため校庭で練習できず、地面のポイントも見えなくなってしまった。そのため、運動会前日の合同練習では、四列から一列への体型移動の練習ができていない状況であった。合同練習後、児童から「一列になるところが完成しないと心が一つになれないよ。」「3年2組だけ校庭に残って練習したい。あきらめないでがんばろう！」との声が上がリ、もう一度練習することにした。クラス全体が意欲を見せている中、A子は「えー。」と練習を嫌がっていた。しかし、練習が始まると、「私（センターポジション）がここだからね。」「○○ちゃん、こっちだよ。」「みんな、並べた？○○ちゃんから曲がついているよ。」と、クラスの友達に呼びかけていた。

一度は練習を嫌がっていたA子であるが「センターポジションだからこそ、練習も中心となってやろう。」「センターポジションでなければ分からない全体の様子は、自分がクラスのみんなに知らせよう。」という気持ちが伝わってきた。

運動会当日は、どの競技もクラス全員真剣に取り組んでいた。ダンスの出番直前には「一列になれるように頑張ろうね。」と声を掛け合っていた。前日残って練習した部分は、本番ではおおむね一列に並ぶことができ、ダンス全体の流れもスムーズに進めることができた。

グラフ1 運動会自己評価



グラフ1より、運動会直前には自分の目標に向けて「あまり頑張れなかった」と自己評価した児童が減り、家でも練習している児童が増えた。また、個人目標に向けた活動について「サニーかがやきカード」を基に振り返り、資料4のように板書及び児童のワークシートにまとめた。

資料4①の下線部より、児童が目標をもつことで意欲がわいてきたことがわかった。そして苦手なことが克服できた児童もいた。資料4②の下線部のような保護者からの感動したことや子どもの成長を喜ぶメッセージは、児童が「お家の人が喜んでくれたから、また頑張る。」と話していたことから、次への意欲へとつなげることができた。同様に資料4③の下線部より友達からの応援が活力となったことも確認できた。板書をまとめていきながら、①～④の内容が自分の「努力」であることに気付くことができた。

資料4①波線部より、A子は自分でも気付かないうちに嫌いなことにも取り組んでいたことが分かる。A子は、運動会後に書いた作文（資料5）で「ダンスが好き」と書いた。嫌いだったことが好きになったのである。また、前のポジションのときから自分が真っ先に一列の先頭に行けるように、意識していたことが分かる。運動会後の会話で「自分が最初に行かないと、みんなで作る一列は完成しないから。」と話していた。前日の練習

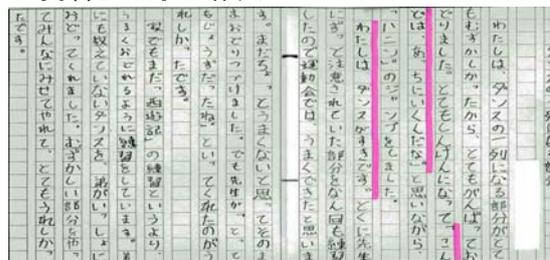
を嫌がっていたA子であったが、当日はクラスのみんなのことを考え、センターポジションとしての自覚をもって参加できた。

資料4 メッセージから気付いた努力・自分で気付いた努力
(板書及びワークシート記入例)

①自分ががんばったこと	②お家の人からのメッセージ
<p>○自分の目標があるとがんばれる ○みんなに力をもたらって運動会をがんばれた ○友達に「がんばって」とおうんした ○走ることが苦手だったけどがんばっていたら苦手ではなくなった ○体を動かすのはきらいなのにとっても体を動かしておどっていた。どうしてだろう？ (A子)</p>	<p>○一生懸命練習したことで自信がついたんだね ○一人一人が練習して1つのダンスができるんだね ○ダンスはみんなで心を合わせたから感動的でした ○最後まであきらめないでがんばることが大事だね ○子どもたちが確実に成長していることがうれしい</p>
<p>○つかれても休み時間に練習していたね ○校庭でいっしょにリレーの練習をしようね ○ダンスをおうちでもがんばっているんだね ○団リレーの選手に選ばれてすごいね ○いっしょにナルトをがんばろうね ○応援してくれたから全部の力を出し切れたよ</p>	<p>○チームのみんなに声をかけてバトンをつなぐことができたね ○楽しくおどっているところを見ているとうれしいよ ○全員リレーの順番決めではたくさん意見を出せたね ○まだあきらめることはないよ ○毎日時間を決めて練習してきたことが実ったんだね</p>
③友達からのメッセージ	④先生からのメッセージ

努力

資料5 A子の作文



2 社会科見学に向けた「サニーかがやきカード」の活用

(1) 活動の概要

学級活動において社会科見学の学級の目標を決め、個人目標を作成し、グループを編成した。「サニーかがやきカード」を基に活動を振り返り、励まし合い協力しながら、小集団で活動することを学んだ。自分の主張だけではなく、友達の見意見を尊重することも大切であるということ考えた。

(2) 実践のまとめ

学級活動において「社会科見学の学級の目標を決めよう」というテーマで話し合ったところ、「す

すんで「楽しく学ぼう」に決定した。理由として資料6の意見が出された。

資料6 「社会科見学」学級の目標の理由

「すすんで」

・見学場所について、グループの友達と声をかけ合いながら、自分たちの力で学習をすすめていきたいから。

「楽しく」

・友達といっしょに活動し、楽しく学びたいから。
・お弁当の時などは楽しく話しながら食べたいから。

話し合いでは「グループの友達と励まし合うことで自分の力を発揮できた」など、運動会で経験したことを基に、友達との関わりを意識した意見も出された。また、「班がばらばらだった」「うるさかった」など、2年生での社会科見学の反省点をふまえ、3年生の社会科見学で意識したいことを考えたところ、資料7の意見が出された。

資料7 社会科見学で意識したいこと

<自分のこと→個人>

○静かに話を聞く ○話の内容を聞き取る ○約束を守る
○メモする ○調べる ○観察する ○落ち着いて行動する

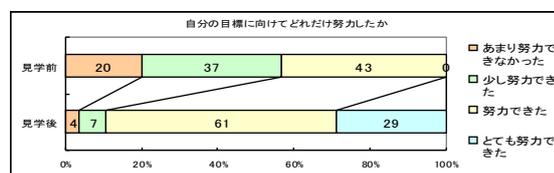
<友達とのこと(グループ クラス)→集団>

○声をかけ合う ○グループで行動・学習 ○はやく集合する

資料7より、社会科見学に向けた学習を通して「個人(自分)が気を付けて活動すること」と「集団(友達)を意識して活動すること」の両方があることに気付いた。そこで、集団を意識した個人目標を設定した。続いて、絹の里・生涯学習センター・群馬県警の中から一番詳しく調べたい見学場所を選び、その見学場所ごとにグループを編成した。これは見学の準備、実施、まとめの全体を通してグループで協力し、活動するためである。

グループでの主な活動は、「バスレクの準備」「当日のバスレク」「絹の里と生涯学習センター(昼食も含む)での自由行動」「見学後のまとめ」である。A子は「社会科見学でなかもといっしょに学習しよう」という個人目標を立て、絹の里について調べるグループの副班長となった。

グラフ2 社会科見学自己評価



グラフ2を見ると見学前は「とても努力できた」「努力できた」を合わせて43%であった。努力できなかった理由として、「個人目標をすぐに決められなかった」と答えた児童が3名いた。自分のために努力することは分かっていても、友達を意識すると何をすればよいのか分からなくなってしまったようだ。しかし、見学後は「とても努力できた」「努力できた」を合わせると約90%となった。児童の活動場面では「時間を知らせる」「ゴミを拾う」「人数を確認する」など、自分の役割を意識した姿を見かけた。単に人数を集めた集団ではなく、実際に友達と関わっていく中で、集団の一員として何をすればよいのかははっきりしてきたようである。見学後、集団で活動してよかったことを尋ねたところ、資料8のように分類できた。

資料8 集団で活動してよかったこと

- 声をかけあってすぐに集合できた (9人) 自由記述
- いっしょに考えたり行動したりした (9人)
- 友達に助けられた (6人)
- 班長や係の仕事がしっかりできた (6人)
- みんなといっしょで楽しかった (4人)
- 声をかけ合った (3人)
- 仲良くなれた (1人)

一方、社会科見学後の学級活動で「見学するペースが合わず集団で活動して困った」と発言した児童がいた。集団での活動は、個人の活動に比べ自由な活動の範囲が制限される場合もある。解決策を話し合ったところ「相手の気持ちになって考える」「全体のことを考える」「よく話し合う」等の意見が出された。児童は資料8に挙げられた集団での活動のよさも、そして、不便さも体験する中で、互いの意見を尊重しながらよりよい集団になるために必要なことにも気付けたようである。

A子は事前準備から副班長としての役割を意識して行動していた。特に、見学当日、班長がバスレクで使うクイズ用紙を自宅に忘れてしまったときは、「念のため自分で考えたクイズを持ってきたよ。」と言って班長に渡し、グループのピンチを救った。また、A子は集団で活動してよかったこととして「副班長の仕事がしっかりできた。班長と時間係と美化係(自分以外の係担当)がいなかったら、たいへんだった。」と記述した。副班長として意識して行動した故に、他のメンバーの存在のありがたさにも気付けたのであろう。資料9は学級活動

において、A子が「サニーかがやきカード」でグループの友達と交換したメッセージである。

資料9 「サニーかがやきカード」より

グループの友達からA子へのメッセージ

- 協力して社会科見学に行けたね。
- A子ちゃんはみんなに声をかけていたね。
- 私にもいろいろやさしくしてくれたね。ありがとう。
- A子ちゃんがいなかったらバラバラになっていたよ。

A子からグループの友達へのメッセージ

- 時計係の仕事をがんばったね。バスの中でクイズをいっぱい出してくれてありがとう。
- そうだんをいっぱいして、いいグループにしようね。
- はん長として声をかけてくれてありがとう。みんながまいごになったりしないですんだよ。

3 持久走大会に向けた「サニーかがやきカード」の活用

(1) 活用の概要

学級活動において持久走大会の学級の目標を決め、個人目標を作成し、グループを編成した。大会後に「自分のために努力したこと」「友達のために努力したこと」「友達との関わりの中でうれしかったこと」をワークシートにまとめた。クラス全員で励まし合うことで自分の力を十分に発揮できるということを考えた。

(2) 実践のまとめ

学級活動で持久走についてアンケート調査を行った結果、持久走が「好き」と答えた児童が19人「好きではない」と答えた児童が16人いた。好きではない理由として、「疲れる」「足が痛い」と答えた。また、全児童に「持久走のよいところ」を尋ねると、多い順に「体力が付く(8人)」「みんなで走ると楽しい(6人)」「自分の努力が分かる(4人)」と答えた。A子は、持久走は「好きではない」と答え、理由として「疲れて、息切れがして、おなかがいたくなる」と答えた。一方、よいところとして「きれいな人も好きになれるかもしれない。」と答えた。運動会で「体を動かすのは好きではないのに、とても体を動かして踊っていたのはなぜだろう?」と感じたことによると思われる。そこで、社会科見学の時に感じた集団のよさをもとに、持久走のよさを生かしながら、「つらくて大変なことも、クラスのみんなで励まし合って乗り越えていこう。」という意識をもってほしいと考えた。

まず学級活動で「持久走大会に向けてみんなが楽しく力いっぱい走るために、練習や本番で何を

すればよいだろうか?」というテーマで考えた。

資料10 友達のために何をすればよいだろうか? また自分がしてもらったらどう思うだろうか?

上段 ○友達のために何をすればよいだろうか?

下段 自分がしてもらったらどう思うだろうか?

<結果> 自由記述

○おうえんする(27人)

うれしい 元気が出る ペースが上がる はげまされる

○いっしょに走る(11人)

うれしい 楽しい たくさん走れる 仲良くなる 力がわく

その他

○ほめる ○コツを教える

○転んだ人に「だいじょうぶ?」と声をかける

資料10の下線部より、「自分がしてもらったらどう思うだろうか」の内容として「うれしい」が最も多かった。これらのことを全員で繰り返していけば、全員が「うれしい」と思えるようになる。また、全員が楽しくなったり仲良くなったり、力がわいてきたりすることで、クラス全員がまとまる。学級活動で話し合う中で、「個々に努力するように見える持久走であるが、クラスみんなの心を一つにして取り組むこともできるのではないか。」「励まし合うだけではなく、持久走が好きな人が走るコツを教えれば、嫌いな人も徐々に好きになるのではないか。」と考えがまとまった。持久走大会に向けた活動の方向性が出た後、資料11の理由から、学級の目標が「つっぱしれ 心を一つに さいごまで」と決まった。

資料11 「持久走大会」学級の目標の理由

「つっぱしれ」

○ゴールまでいきおいよく走りぬけられるように。

「心を一つに」

○運動会の時のように、みんなの心が一つにまとまるように。

「さいごまで」

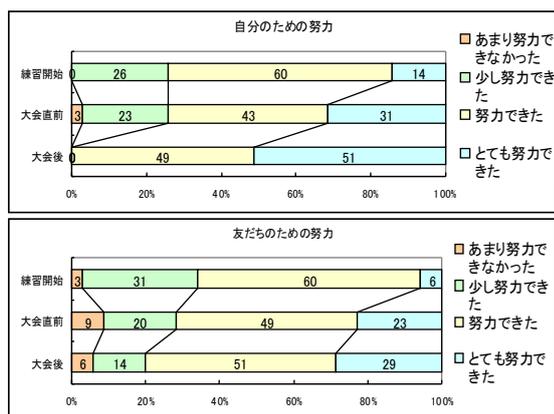
○ゴールが本当の最後ではない。ゴールの後も努力したことをみとめ合ったり声をかけ合ったり…そういうこともふくめて最後までみんなでいっしょにがんばろう。

次に個人目標を考えた。今回は「自分のために努力する目標」と「友達のために努力する目標」の2つ作成した。そして、持久走が好きな児童と好きではない児童がほぼ同数ずつになるようにグループを編成した。これは、走るコツをグループ内で教え合ったり、応援し合ったりすることで、一人でも多く持久走を好きになれるようにするためである。持久走の練習が始まると、自分のための活動と同時に友達のための活動も始まった。校

庭での練習では同じグループの友達に「あと〇週だよ。」「手をいっぱい振って。」「2回吸って、2回はくんだよ。」「ゆっくりでもいいから走り続けよう。」などと声を掛けていた。自分のグループの友達が通り過ぎると違うグループの友達も同じように応援し、応援の輪はクラス全体に広がった。担任として「クラスみんなが心を一にすることができたな。」と感じた。

グラフ3 持久走大会自己評価

自分のための努力・友達のための努力



グラフ3の「自分のための努力」の自己評価を見ると、練習を重ねるごとに「努力できた」「とても努力できた」が増加している。これは児童の記録にも表れた。試走を含め3回コースを走った結果、ほとんどの児童が本番で自己ベストタイムを出すことができた。自己ベストタイムを出せなかった3名のうち、2名は大会後の会話で「今までが一番歩かなかった。」「風邪気味だったけど最後まで走れた。」と話し、自分が努力したことを振り返っていた。1名は「くやしい。」と話していた。この児童は休み時間もクラスで一番熱心に練習し、自宅でも腹筋や背筋を鍛えたり、近くの公園で走ったりしていた。「『くやしい』と思えることは素晴らしいことだよ。練習も本番も精一杯取り組んだ〇〇くんだからこそ、味わえた気持ちだよ。」と声を掛けた。見学者2名も大会後の感想で「ゴールした後うれしそうにしている友達を見て、私もいっしょにうれしくなった。」「おうえんで1位をとった。」と書いていた。見学した児童も気持ちは一緒に走っていたのだと感じた。

持久走大会後、2つの目標について振り返った。

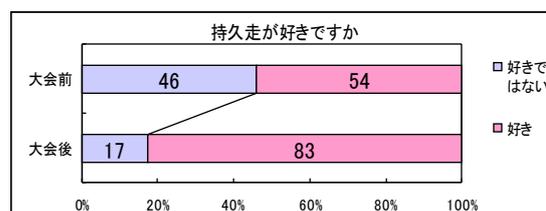
資料12 自分のために努力したこと
友達のために努力したこと

「自分のために努力したこと」	
○ゴールまで歩かず走った	12人
○休日や家に帰ってから走った	11人
○友達に教わったコツをやってみた	9人
自由記述	以上数の多かった3項
「友達のために努力したこと」	
○おうえんした	33人
○走るコツを教えた	5人
○声をかけて練習をさそった	2人

ほとんどの児童が自己ベストタイムを更新し、満足のいく走りができたのは、資料12のように自分のために努力したことと、友達のために努力したことの相乗効果と思われる。これは、グラフ3において、「自分のための努力」と同様に、「友達のための努力」も練習を重ねるごとに「努力できた」「とても努力できた」が増加していることから分かる。

持久走大会後、再度、持久走が好きかアンケート調査を行った。その結果がグラフ4である。

グラフ4 持久走アンケート結果



グラフ4から、持久走大会後は持久走が「好き」と答えた児童が全体の83%となった。この大幅な増加は、自分の努力と友達の努力との相乗効果により、自分で「十分に力を発揮できた」と感じた児童が増えたことによると思われる。大会前は持久走が好きではなかったA子が、大会後は「好き」と答えた。A子は大会後の学級活動で、「走るコツが書かれた本を読んで、その通り練習で走ってみたら速く走れた。」と発言した。A子なりに努力を重ねていたのだ。そして、持久走が「好き」と答えた理由として「がんばったらママに『えらかったよ!』と言われてうれしくなったからです!」と書いていた。家族の一言で、A子は苦手意識を取り除くことができたのであろう。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

本研究は、一貫して「サニーかがやきカード」を活用し、保護者の方々にも協力していただきながら、児童の成長の様子を記録することができた。その中で、何事においても目標をもつことが児童の成長の第一歩であると、改めて感じた。

持久走大会後、学級活動において3つの行事における「サニーかがやきカード」を用いた活動を振り返った。行事ごとに意識の割合を個人から集団へと移行した（運動会→個人 社会科見学→グループ集団 持久走大会→学級集団）ことを基に、集団で活動することのよさとは何か尋ねた（自由記述）ところ、資料13のような意見が出された。

資料13 集団で活動することのよさ

○一人ではわからない(できない)ことが集団ならわかる(できる) ○応援してもらってやる気が出る ○勇気がわいてくる ○協力できる ○励まし合える ○友達の良いところを知ることができる ○「サニーかがやきカード」で優しい言葉をくれた ○一人ではつまらないことも友達となら楽しくなる ○仲良くなれる ○一人では心細いけど友達といると嬉しくなる ○なやみごとが相談できる ○気持ちを分け合える ○みんなで心をつにつにできる

資料13の下線部から、自分一人で頑張るのではなく、みんなで支え合うことで自分の力を発揮することができるということに気付いた。この他に「友達に励ましてもらったり、アドバイスをしてもらったりしたら、自分をもっとよくなる。」という発言があった。資料13の波線部も含め、「サニーかがやきカード」を用いた活動を通して、グループや学級という集団が心をかよわせて一つにまとまるのが、自分自身の成長にもつながるということにも気付くことができた。

「サニーかがやきカード」では、「少しでも学校での児童の成長が家庭にも伝われば。」という思いから、各家庭にも渡し、見ていただいた。3つの行事を終えたとき、保護者の方々から『サニーかがやきカード』に書いてあること（子どもが頑張ったこと）をきっかけに、親子で会話をすることができました。「去年まではいやいや取り組んでいたことを、今年は楽しんでいきます。」「子どもとの会話の中で、いろいろな友達の名前が出てくるようになり、友達と仲良くできているのだなあと、安心しました。」「子どもの欠点ばかりが気になっていましたが、できるだけこれからはよいところをほめていきたいです。」「子どもの成長が感じら

れて、うれしいです。」などといった温かいお言葉をいただき、励みになった。

そして、子どもに「ありがとう」と伝えた保護者もいた。普段言葉にはできなくても、カードを通してならば子どもへの感謝の気持ちも伝えやすかったのだと思う。保護者からのメッセージを見て、嬉しそうにしている児童の姿も見られ、担任としていっしょに嬉しくなった。

また、家庭での成長の様子を担任に伝えてくださった保護者もいて、学校では見られない児童の一面を知ることができた。このことにより、担任としてより広い視野で児童に接することができたと思う。そして、同じ内容を伝えるにしても、以前より児童の心に響く言葉が自然と出てくるようになったと、自分でも感じた。この活動を振り返り、児童だけではなく、自分自身も教師として、人として、成長できたような気がした。

2 課題

保護者に「おうちの人からのメッセージ」の記入をお願いしたのであるが、普段子どもへ愛情をもって接している方であっても、文章を書くのが苦手な方にとっては、負担になってしまい、申し訳なく感じた。記入については定期的に継続していくものなので、家庭の協力が可能な範囲で取り組むことが望ましいと考える。

児童が記入する「友達へのメッセージ」では、自分は友達を褒めたつもりでも、相手にしてみると自分のマイナス面として受け取られる場合がある。悪気はなくても、友達に渡す前に受け取った相手がどう思うか考えさせることも大切である。そして、担任の目で児童のメッセージを一つ一つ確認することも大切であるとする。

今回は比較的目標をもちやすい行事を中心に活動してきたが、今後は、基本的な日常生活においても自分の目標をもたせ、支え合いながら共に成長していける人間関係を築いていきたい。

(担当指導主事 関口 満)

Web検索キーワード

【学級経営 小学校 学校行事 学級集団
学級活動 保護者】

(参考文献)

・有村 久春 編者 『START BOOK』
開発研究所(2003)